

平成28年1月7日

原子核談話会事務局 近藤洋介

「核物理委員会委員の選挙について」

原子核談話会の執行機関である核物理委員会委員の任期が2016年3月31日をもって終了します。原子核談話会規約第7条の規定により、次期委員の選出を下記の要領にて行います。別紙に資料として、現在の委員名簿と今回の候補者一覧と所信表明を添付しましたのでご参照下さい。

1. 選出人数 : 10名
2. 任期 : 2016年4月1日～2018年3月31日 (2年間)
3. 被選挙資格 : 原子核談話会の有権者
4. 投票方法 : 5名連記

【投票方法】

- 核物理委員 : 5名連記
- 投票用紙 (下記) に候補者の氏名を記入し、小封筒 (これには投票者の所属・氏名を記入しないでください) に入れ、さらに各自適当な封筒に入れて、それに投票者の所属・氏名を記入して封をして下さい (この署名がない場合無効票となります)。小封筒には大阪大学核物理研究センター運営委員会(核運委)委員と研究計画検討専門委員会(研計委)委員の投票用紙も同封してください。
- 各個人で投函されても、数人でとりまとめて送られても構いません。とりまとめる際には、上記のように封緘・署名した各投票者の封筒を、まとめてお送りください。

投票締切日 : 平成28年1月20日 (水) 必着

送付先 : 〒152-8551 東京都目黒区大岡山2-12-1  
東京工業大学 大学院理工学研究科 基礎物理学専攻  
南5号館502AB号室 (メールボックス : S5-2)  
近藤洋介 宛  
Tel: 03-5734-2729 e-mail:kakudan@rcnp.osaka-u.ac.jp

----- 切り取り線 -----

核物理委員 選挙投票用紙 (平成28年1月)

核物理委員 5名連記


(核物委資料1) 核物理委員会 委員名簿

(任期：2016年3月31日まで)

区分	氏名	所属
核物理委員長	田村 裕和	東北大(院)理
副委員長	櫻井 博儀	東大(院)理・理研仁科加速器研究センター
幹事	青井 考 小澤 恭一郎	阪大核物理研究センター・領域代表 高エネルギー加速器研究機構
委員	岩崎 雅彦 上坂 友洋 齋藤 直人 酒見 泰寛 下浦 享 田中 万博 永江 知文 中村 隆司	理研仁科加速器研究センター 理研仁科加速器研究センター J-PARC センター長 東北大サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター 東大原子核科学研究センター 高エネルギー加速器研究機構 京大(院)理 東工大(院)理工
補充委員 (注1)	岸本 忠史 野呂 哲夫	阪大(院)理 九大(院)理
ex-officio 委員 (注2)	延與 秀人 徳宿 克夫 中野 貴志	理研仁科加速器研究センター長 高エネルギー加速器研究機構・素核研所長 阪大核物理研究センター長
連携委員 (注3)	大塚 孝治 濱 広幸	東大原子核科学研究センター長 東北大電子光理学研究センター長

注 1 補充委員は選挙後、地域や分野などを考慮して委員に加えられました。

注 2 ex-officio 委員は共同利用研究所の所長・センター長として委員会に参加して頂いております。自動的に委員となりますので被選挙資格はありません。

注 3 連携委員は、上記3つの施設の代表の役目を兼ねる委員です。施設の長が原子核談話会会員の場合、被選挙権を持ちますが、当人が選挙で選ばれなかった場合には連携委員として委員になっていただきます。施設の長が原子核談話会会員でない場合には、自動的に連携委員となっていただきます。連携委員は、ex-officio 委員と異なり、委員会への出席にあたって代理を指名できます。

## (核物委 資料2)核物理委員被選挙者リスト H28.1

推薦・自薦 候補者	所属・職	推薦者	所属・職	推薦理由
推薦	青井 考 阪大RCNP・教授	上坂 友洋 理化学研究所・主任研究員		共同利用研RCNPのリングサイクロロン施設及び大型ガンマ線検出器を用いた原子核研究を主導されている方であり、核物理コミュニティとして今後の大型施設での研究を考える上では必須の方だと思います。
		野海 博之 阪大RCNP・教授		青井氏は、RCNPのサイクロロン実験施設の責任者として共同利用実験の充実と発展に尽力され、最近、ガンマ線検出器を用いた国際共同研究プロジェクトを率いて新しい利用者を開拓された。核物理の次期将来計画を策定する上で中心的役割を果たすべき氏には、引き続き、尽力してもらいたいのので、核物理委員の候補者として強く推薦する。
推薦	岩崎 雅彦 理研仁科センター・主任研究員	大西 宏明 理研仁科センター・専任研究員 ／阪大RCNP・准教授 四日市 悟 理研仁科センター・専任研究員 佐久間 史典 理研仁科センター・専任研究員		岩崎氏はJ-PARCにおける原子核ハドロン物理を強力に推進してきた研究者です。J-PARCハドロンホールで展開される物理の更なる発展のため、また、ハドロンホール拡張計画を含む将来計画推進のためにもなくてはならない存在です。核物理委員会に必要不可欠と考え、推薦いたします。
		田中 万博 高工研・素核研・教授		岩崎さんは理研先端中間子研究室の主任として、核物理のみならずミュオンを用いた物性研究から素粒子実験まで、多様な研究を推進してこられました。さらに理研の科学者会議の議長をされるなど、我々からは余り見えない所ではありますが、日本の学術振興におおいに寄与して下さっています。時々何を考えているのか良く判らない時もありますが、その誠実な人柄と強力な推進力は日本の核物理に欠かせないものです。こういう次第ですので、岩崎さんには今後とも核物理委員として、日本の核物理に寄与していただきたいと思っています。
		野海 博之 大阪大RCNP・教授		岩崎氏は中間子先端研を率いて核物理のみならず素粒子物理から物性物理まで非常に幅広い科学研究を手掛けられる。「日本の核物理の将来計画」改訂作業が進められる中、氏の広い見識と非常に柔軟な発想から繰り出される意見が求められる。引き続き、核物理分野の発展に発揮して頂きたいので、核物理委員の候補者として強く推薦する。
推薦	上坂 友洋 理研仁科センター・主任研究員	中村 隆司 東工大(院)理工・教授		核物理委員会では、核談ホームページの改訂などを行った。核物理委員会主導で立ち上げる将来計画WGのリーダーとして、重要な役割を果たすことが期待されている。
		青井 考 阪大RCNP・教授		上坂氏は核構造・核反応研究の分野で中心となって活躍している研究者で、RIBFを牽引するだけでなく、様々な加速器施設で研究を展開されており、国際的にも広く認知されています。現在でも核物理コミュニティの運営に深く尽力されており、核物理委員にふさわしい方です。
推薦	上野 秀樹 理研仁科センター・主任研究員	酒見 泰寛 東北大CYRIC・教授		上野氏は、低速・停止不安定核ビーム(SSRI)領域において、核物理、基礎物理、さらに物質科学にわたる研究を広い視野で展開する第一人者です。この広範な領域に渡るSSRIコミュニティの代表も務めている上野氏は、物理が関わる多彩な学術分野のバランスを考えながら、核物理の将来を牽引していく研究者として重要な存在であり、核物理委員に推薦させていただきます。

推薦	小沢 恭一郎 高工研・素核研・准教授	石川 貴嗣 東北大ELPH・助教	J-PARC、RHIC、LEPS2 といった多岐にわたる実験施設でハドロン物理の研究を行っている。また J-PARC において高運動量ビームラインの建設を推し進めており、GEM などの装置開発にも精通しておられる。サマーチャレンジなど啓蒙活動にも貢献している。よって核物理委員としてふさわしいと考える。
		大西 宏明 理研仁科センター・専任研究員 / 阪大RCNP・准教授	小沢氏はJ-PARC高運動量ビームラインにおけるハドロン物理の推進だけではなく、幅広く活躍されている研究者です。また、現在建設への機運が高まっているハドロンホール拡張計画や新施設で実施するハドロン物理を強力に推進するためにはなくてはならない存在です。核物理委員会に必要不可欠と考え、推薦いたします。
推薦	川畑 貴裕 京大(院)理・准教授	青井 考 阪大RCNP・教授	川畑氏は京都大学やRCNPを舞台に研究・教育の両面において力を発揮されており、核物理の将来を担う若手研究者として期待されています。若手の視点から日本の核物理の方向性を議論して頂ける方として核物理委員に推薦いたします。
推薦	齊藤 直人 高工研・素核研・教授 / J-PARC センター長	小沢 恭一郎 高工研・素核研・准教授	齊藤直人氏は、スピン物理、ミューオン物理を中心となって遂行されている世界的に見ても非常に優秀な研究者です。その物理に対する見識の高さは、誰もが認める場所であると思います。また、近年は、J-PARCセンター長として施設運営にも力を発揮されており、物理研究の面と現実的な施設運営を高いレベルでバランスできる稀有な人材と思います。その面で、核物理委員会には必須な存在であると考え、推薦いたします。
		中野 貴志 阪大RCNP・センター長	J-PARCセンター長という激務の中でも、ミューオンを使った基礎物理研究を中核となって推進されている。J-PARCハドロンホールの拡張という悲願を核物理コミュニティが達成するためには、核物理委員会に齊藤氏は欠かせない。
推薦	櫻井 博儀 東大(院)理・教授 / 理研仁科センター・主任研究員	上坂 友洋 理化学研究所・主任研究員	日本の不安定核研究のリーダーとして、強い求心力を持って研究を進めておられています。やはり核物理委員としては欠かせない方だと思います。
		中村 隆司 東工大(院)理工・教授	核物理コミュニティを代表する一人である。物理学会とのパイプももっている(理事)。RIBFの副センター長であり、不安定核分野のリーダー的存在である。東大教授として教育面でも重要な役割を果たされている。
推薦	佐甲 博之 原研・先端研/J-PARCセンター・研究主幹	永宮 正治 理研・研究顧問/高工研・名誉教授	佐甲博之氏(原研・先端研)を推薦したいと思います。昔は、いつも、原研から一人必ず入っていたこともあり。最近、佐甲氏はJ-PARCにおける重イオン加速のまとめ役になっており、この動きに賛同される方も、多く居ります(たとえば、田村氏や小澤氏、さらには田中万博氏や齋藤センター長も)。そういった意味でも、委員として適切かと思ひ、よろしくお願い申し上げます。
推薦	澤田 真也 高工研・素核研・准教授	小沢 恭一郎 高工研・素核研・准教授	澤田真也氏は、ハドロン物理の将来計画であるハドロンホール拡張計画を中心となって進めておられます。ハドロンホール拡張計画を進めるうえで欠かせない人物であるので、核物理委員としてふさわしいと考えて、推薦いたします。
		田中 万博 高工研・素核研・教授	澤田さんはJ-PARCハドロン実験施設が放射能漏れ事故で運転停止に追い込まれたまさに危急存亡の時に、あえて火中の栗を拾われハドロンセクション長を引き受けられ、その後多くの苦労を経験されながらも2年の歳月を経て運転再開を実現されました。このような重要な経験、実績を有される澤田さんには、核物理委員として、日本の核物理の推進にも寄与していただきたいと思っています。

推薦	下浦 享 東大CNS・教授	上坂 友洋 理化学研究所・主任研究員	核物理委員会で混みいった議論になったとき、公正な立場から本質論を述べられる貴重な方です。是非委員となっていたきたいと思います。
		青井 考 阪大RCNP・教授	下浦氏は東大CNSの不安定核研究を牽引しており、物理に対する深い洞察力と実験技術に関する幅広い知識をもって多角的に研究を推進されています。他分野や海外の研究者とのパイプも太く、核物理コミュニティーの運営に欠くことができない方です。
推薦	田中 万博 高工研・素核研・教授	小沢 恭一郎 高工研・素核研・准教授	田中万博氏は、長年にわたりKEK-PS、J-PARCでのハドロン実験施設を中心となって運営されてきました。その施設運営の中で、どのようなプロジェクトを優先させていくのかという点において、高い物理に対する見識を示されています。また、ハドロン実験のみにとどまらず、広く核物理の現在と将来に対して、大きな視点から意見できる存在として、核物理委員会には必須な存在であると考え、推薦いたします。
		家入 正治 高工研・素核研・教授	田中万博氏を次期核物理委員会委員に推薦いたします。田中万博氏は、KEK-PSの北カウンターホール、K2KビームラインからJ-PARCハドロン実験施設に至るまで、陽子加速器共同利用実験施設の設計・建設・運営に携わり主導されてこられました。そのリーダーシップにより各施設は大きな遅れもなく完成し、共同利用に供する事ができました。また、J-PARCハドロン実験施設での事故においては、ハドロン施設の責任者として直接的な要因を追求し検討され、再発防止のための施設の改修を軌道に乗せられました。氏は施設管理責任者の職から離れられた後も施設改修に尽力されました。現在、J-PARCハドロン実験施設は再生し、順調にビーム強度を増強させながら共同利用実験に供されています。氏は常に広く情報を集められ、公平な判断のもと、核物理の将来像を常に考えておられます。このような氏の手腕と態度は核物理を牽引する核物理委員会に活かされるべきであり、さらなる核物理の発展に尽力して頂けるものと強く期待します。
		高橋 俊行 高工研・素核研・准教授	日本が世界に誇る加速器施設J-PARCで原子核・ハドロン研究を更に発展させるため、ハドロン施設の拡張などJ-PARC高度化をコミュニティー一丸となって進めなければならない。そのためには、豊かな経験や指導力を持つ田中氏の活躍が不可欠である。
		澤田 真也 高工研・素核研・准教授	田中氏はこれまでKEK-PSおよびJ-PARCでの原子核・ハドロン物理研究を主導してこられた。また、原子核・ハドロン物理分野に限らず、加速器等の隣接分野に関する造詣も深く、核物理委員会にて今後の核物理コミュニティーの方向を議論する上で欠くべからざる方である。
		野海 博之 阪大RCNP・教授	田中氏はJ-PARCハドロン実験施設の建設・運転チームを率いてこられ、震災復興を果たされた後の放射能事故を正面から受け止め、社会からの信頼回復に向け責任を果たしてこられた。ハドロン施設の運転は再開されたが信頼回復はなお途上である。学術の大型計画のロードマップ2014に掲載されたハドロン施設拡張の実現に向けた大事なこの時期こそ、氏の経験を發揮してもらい分野の基幹施設であるJ-PARCを充実させることが、核物理分野の将来に重要と考えるので、核物理委員の候補者として強く推薦する。

推薦	田村 裕和 東北大(院)理・教授	上坂 友洋 理化学研究所・主任研究員	これまで委員長として核物理コミュニティを牽引されてきた方で、核物理委員会としては欠かせない方だと思います。
		田中 万博 高工研・素核研・教授	田村さんはこれまで東北大学の強力な実験チームを率い、KEK-PS、J-PARCのみならず、世界の実験施設を舞台にハイパー原子核の研究を推進してこられました。さらに核物理委員長、学術会議委員として、核物理のみならず日本の学術振興におおいに寄与して下さっています。私は田村さんには今後とも核物理委員長として、日本の核物理をリードしていただきたいと考えております。
		高橋 俊行 高工研・素核研・准教授	学術会議大型計画のマスタープランの改定を控えている中、我々核物理コミュニティ悲願の計画を実現するためには、これまでプランの策定に深くかかわってきた田村核物理委員長の力は是非とも必要である。
		澤田 真也 高工研・素核研・准教授	田村氏はJ-PARCハドロン実験施設におけるハイパー核の $\gamma$ 線分光研究など、原子核・ハドロン物理分野の鍵となる実験を主導しておられる。また、これまで核物理委員長として、コミュニティを代表して各機関等との間で情報交換等をされてきた実績は素晴らしい。引き続き核物理委員としてご活躍いただきたいと思います。
		野海 博之 阪大RCNP・教授	田村氏はストレンジネス核物理の分野を主導する世界的権威である。このたび、氏が核物理委員長として主導された「日本の核物理の将来計画」のその後の進展と改訂作業が始まっている。引き続き、核物理分野をけん引していただきたいので、核物理委員の候補者として強く推薦する。
		中野 貴志 阪大RCNP・センター長	代表として、新学術領域研究「中性子核物質」を立ち上げ、強力に推進されている。核物理委員長として、大型計画の推進や2014年ハワイ日米合同学会等で強いリーダーシップを発揮された。分野を代表してANPhA委員等を務められており、核物理委員会に欠かせない。
推薦	永江 知文 京大(院)理・教授	田中 万博 高工研・素核研・教授	永江さんはこれまで核研、KEKそして京都大学において精力的にハイパー原子核の研究を推進してこられました。原子核のメジャーシェル構造の存在を直接的に示されるなど、その重要な成果は枚挙するに遑がありません。さらにこれまで核物理委員、学術会議委員として、核物理のみならず日本の学術振興におおいに尽くして下さいます。このような次第ですので、永江さんには今後とも核物理委員として、日本の核物理をリードしていただきたいと思います。
		澤田 真也 高工研・素核研・准教授	永江氏はKEK-PSの時代から現在まで使われているSKSシステムを構築し、実験研究を進めてこられた。また、今後氏が代表となって製作が行われたS-2Sシステム(大型電磁石による分光器)がJ-PARCハドロン実験施設に設置され、本格的なS=-2システムの研究が行われようとしている。このようなことから、核物理委員会において現在から未来までの原子核・ハドロン物理を議論する際に欠くべからざる方である。
		野海 博之 阪大RCNP・教授	永江氏はストレンジネス核物理の分野を主導する世界的権威である。「日本の核物理の将来計画」の改訂作業が始まったように、10年、20年以降を見据えた核物理の次期計画策定が求められるこの時期に、氏の深い洞察と高い見識が必要である。引き続き、核物理分野の発展にお力を発揮して頂きたいので、核物理委員の候補者として強く推薦する。
		中野 貴志 阪大RCNP・センター長	ストレンジ核物理を中心に原子核からハドロンまで幅広い研究分野でリーダーシップを発揮されている。素核研の運営協議会委員、核物理研究所運営委員、J-PARC利用者協議会委員を長期に渡って務められていて、これらの研究機関でコミュニティの意見が運営に反映されるよう尽力されている。

<p>推薦 中村 哲 東北大(院)理・教授</p>	<p>上坂 友洋 理化学研究所・主任研究員</p>	<p>現在主として電子ビームを用いたハイパー核研究をされていますが、幅広い見識をお持ちで、RIビームファクトリーの研究課題採択委員として不安定核物理実験にも的を射たご助言を頂いています。田村さんと所属を同じくしていたためかこれまで委員をされていませんが、ご出陣いただく時期かと思います。</p>
<p>推薦 中村 隆司 東工大(院)理工・教授</p>	<p>上坂 友洋 理化学研究所・主任研究員</p>	<p>ハロー核の研究で国内外で高く評価されている方で、核物理委員会では大学教員の視点から重要なご意見を発信されています。</p>
	<p>青井 考 阪大RCNP・教授</p>	<p>中村氏はRIBFにおける研究の柱の1つであるSAMURI計画を牽引している研究者で、世界の不安定核研究分野における中心人物の一人といえます。「日本の核物理の将来レポート」のとりまとめの実績は記憶に新しく、今後も核物理のための尽力が期待できると考え、核物理委員に推薦いたします。</p>

## (核物委 資料3) 核物理委員候補者 所信表明 (以下敬称略)

青井 考 (あおいのり)

大阪大学核物理研究センター・教授

現在の日本の核物理分野は世界をリードする研究施設を数多く持ち、大規模施設のみならず中規模、小規模施設でも、それぞれ特徴のある研究を推進し分野を牽引しています。各施設がそれぞれの役割を果たして最大限の研究成果をあげ、未来に発展させていけるよう尽力できればと思います。

---

岩崎 雅彦

理研仁科センター・主任研究員

日本には世界に誇るべき加速器研究施設がある。これを十全に使って自然（宇宙）の成り立ちを解き明かすことこそ我々が果たすべき使命であるが、全く簡単ではない。実際、十全な活動をするには、様々な施設で更なる追加投資が必要になっている一方で、現在我々を取り巻く環境は非常に厳しい。これまでの努力を繰り返すだけでは夢に近づくのは難しい。多様な人材が馴れ合いを排して切磋琢磨し、全員がそれぞれ独自の切り口で多角的にひたすら夢を追い続けることが大切で、そうすることで初めて、それぞれの夢が開くことにつながると思う。今後とも委員会を通し、学会がそのような場であり続け、学会が多様な取り組みをすることを助け、学会を構成するそれぞれの夢が叶うように、努力を惜しまず尽力したい。是非とも皆さんのお力をお借りしたいと思う。

---

上坂 友洋

理研仁科センター・主任研究員

RIBF・J-PARC・RCNP という世界ナンバーワンの加速器施設を複数持つという、日本の原子核物理学史上初めての恵まれた環境にありながら、必ずしもそのポテンシャルを100%活用し切れないでいる状況の改善こそが、今コミュニティの力を結集して取り組まなければいけない喫緊の課題です。その意味で、核物理委員会の果たすべき役割は日増しに大きくなっていると痛感しています。また、今後10年、20年の核物理研究を見渡す時、(前回選挙の時に抱負として掲げたことですが、) 大学独法化後の変化や研究所のあり方の変化の中で、研究所と大学の研究者がよりコヒーレントに良い研究を進められる新しい仕組みが必要であると感じています。こちらは長期的な視点で取り組まなければいけない課題です。微力ながら、以上のことに貢献できればと思っています。

---



上野 秀樹

理研仁科センター・主任研究員

多くの方々をご存じの通り、被推薦者が所属する理研仁科加速器研究センターでは、先達の成し遂げてきた研究・開発が結実し、世界をリードする加速器施設が整備されながらも、電気代高騰その他様々な制約のためにその能力を十分に発揮しきれずにいます。環境改善・成果の充実などによりこの状況を打破し、更には将来計画を策定し夢のある将来へと道が拓かれるよう努力するのが、他の主任研究員と共に本務先で自身に課せられたミッションなのですが、これはそのまま国内の多くの加速器施設にあてはまり、核物理コミュニティ全体で努力すべき状況にあると理解しております。自身の置かれた立場を活用し、核物理コミュニティとの連携を図りつつ、微力ながら状況改善に貢献できればと思います。

---

小沢 恭一郎

高工研・素核研・准教授

核物理委員に推薦頂きありがとうございます。

原子核物理学は、原子核や核子の相互作用に対する理解を基本として、不安定核、中性子過剰核、ストレンジ核、ハドロン物理などにその研究分野を広げてきました。その結果、現状の原子核物理学は、超冷中性子から高エネルギー重イオン衝突まで多種多様な研究テーマを持つに至っています。そのような多様な研究を、委員会の中では若手である立場から、なるべく現場の声を反映させる形で、支えて発展させていきたいと思っております。

特に、これまで一緒に仕事をしてきた低エネルギーから高エネルギーまで様々な研究者との横のつながりを重視して、実験施設や研究課題を超えた共通の課題に対して少しでも改善できるように全力を尽くします。

よろしく願いいたします。

---

川畑 貴裕

京大(院)理・准教授

核物理委員に選出された際には、原子核物理学分野の発展に微力を尽くしたいと思います。

特に10年後を見据えた将来計画を議論することは我々の世代の仕事であると考えます。最近、活動を再開した核物理の将来WGでの議論に積極的に参加しつつ、将来計画の具現化に努めていきたいと思っております。個人的には、RCNPの将来計画に強い関心を持っています。大型施設の将来計画にユーザとしてどのような貢献をなすべきか、大学に所属する教員として、人材の供給源である大学と基盤装置や資金を有する大型研究施設の協力関係の形についても考えていきたいと思っております。

---

齊藤 直人

高工研・素核研・教授 / J-PARC センター長

今年度から、J-PARC 施設全体をあずかる立場になりました。事故から回復したハドロン実験施設では、ユーザーと施設で協力して、サイエンスの成果を生みだしつつあります。一方、この分野でも相当数のユーザーが利用している物質・生命科学実験施設では、中性子標的の不具合で二ヶ月近い運転停止が二度もあり、多くの方にご迷惑をおかけしています。改めて、複合施設運営の難しさが浮き彫りになりましたが、今後も、複合施設のポジティブな側面、すなわち、効率的な施設運営と、分野融合による新領域の開拓に成果があげられるよう、努力を続けたいと思います。

J-PARC は、世界にも稀な多目的複合施設であり、原子核・素粒子、物質・生命科学、そして今後は核変換と多岐にわたる分野とそれを支えるコミュニティの共通の財産です。僕らは、核物理の基礎にある、自由な発想とフロンティア精神をもって、国内や海外の大学・研究拠点との連携を深めて、成果を上げて行きたいと考えています。

そのために、運転時間の確保は非常に重要な問題です。この問題は、J-PARC だけではなく、RIBF や、SuperKEKB など大学の施設にも共通の問題ですので、今後も協力して解決に向けて頑張りたいと思います。

前回は述べたことですが、上述の事は、全て、核物理委員に選ばれなくてもやる事なのですが、より緊密な情報の共有の為に、委員である事が望ましいです。

---

櫻井 博儀

東大(院)理・教授 / 理研仁科センター・主任研究員

国内の原子核物理学実験研究をさらに発展させるために貢献する。多くの実験研究は加速器施設を利用しているが、大学・研究所の法人化、国内の厳しい財政状況、欧米並の三極化など問題が山積している。将来を見据えて適宜これらの課題に対処したい。

---

佐甲 博之 (さこう ひろゆき)

日本原子力研究開発機構・先端研 / J-PARC センター・研究主幹

核物理委員として務める機会を頂けた際には、日本の核物理の多様化、加速器研究者との協力、国際協力の推進に微力を尽くしたいと思っております。J-PARCハドロン施設は、放射線事故から復活し、今まさに原子核・ハドロン分野においても重要な成果を創出し始めました。これからは、所期の大強度ビームを実現するとともに、高運動量ビームラインにおける実験等へと向かっています。私は、現在、これらの実験に参加しております。一方、現在、核物理の様々な分野において将来計画の議論が行われています。それらの議論に積極的に関わると共に、その中で、J-PARCにおける重イオン計画を提案したいと思っております。通常原子核密度から中性子星の内部構造に迫る高密度までのハドロン原子核物理、QCD相構造の物理へと、RHICやLHCにおいて活躍してきた研究者と、国内の研究者との力を結集して日本の核物理分野のさらなる多様化を実現し、さらに、それを現在進められているハドロン施設拡張計画に繋げたいと思っております。

これらの計画の実現のためには世界に誇る日本の加速器研究者の力が不可欠です。特に世界最高レベルの大強度重イオンビームの実現は加速器科学としても非常にチャレンジングな研究になります。加速器研究者と核物理研究の新しい方向も探っていきたいと思えます。このような多様な物理が可能となると、世界における役割はますます重要となって行き、国内の施設においても世界中のユーザーと共に研究をしていくことが重要になります。国際協力による共同研究、人材・技術交流の推進にも力を入れたいと考えております。

---

澤田 真也

高工研・素核研・准教授

J-PARC ハドロン実験施設ではビーム強度も徐々に増し、当初からの大きな目的である K中間子を使った原子核・ハドロン物理実験が本格化しようとしている。また、ハドロン実験ホールの拡張を中心とした将来計画は、学術会議によって高評価を受け、その現実性が高まっている。一方で、大型研究施設の運転経費の獲得には毎年困難があり、研究所・大学の予算減や減員という状況がある。このような中、原子核分野全体としてのアクティビティをどのようにして保ちまた向上させていくのか、どのような工夫があり得るのか、J-PARC をベースにしながらも広く原子核分野全体のみなさんと相談していきたい。

---

下浦 享  
東大 CNS・教授

様々な状況変化にさらされている核物理コミュニティのために微力ながら貢献できるよう努めます。

---

田中 万博 (たなか かずひろ)  
高工研・素核研・教授

核物理委員候補に推薦していただき、ありがとうございます。ご存じの通り J-PARC ハドロン実験施設は、放射性物質漏洩事故からほぼ 2 年後の、2015 年 4 月によりやく共同利用実験を再開することが出来ました。これはひとえに皆様の多大なるご支援と、現場で立ち働いた諸君らの絶大なる努力のおかげです。誠に感謝の念に堪えません。

再開後の運転は順調に推移し、4 月、6 月そして 10 月から 12 月とほぼ 5 ヶ月にわたり安定にビーム供給運転を行う事ができました。ビームパワーも最終的には 42kW に達しました。これは事故時のパワーである 24kW のほぼ倍の値です。この間にいくつかの画期的な成果が得られ、さらに多くのデータが解析中です。ビームが止まった 2 年間に準備した多くの安全に係わる施策もうまく働いているようで、この間大きなトラブルもありませんでした。しかしながらこれで気を抜くこと無く、さらに安全で安定な運転にむけての精進を重ねて行くことが肝要です。

本来は 2 年前にそうなるべきであったのですが、J-PARC はよりやく『世界最高の舞台』となってきました。今後とも素晴らしい核物理の成果が次々に出てくる事を信じています。私自身は運転再開により、核物理分野の一員として、ほぼ成すべき事は終わったと感じていますが、今回核物理委員への再度のご推薦をいただきました。もしもう一度選んでいただけるならば、ハドロン実験施設と日本の核物理のさらなる発展にむけて、最後の力を尽くしたいと思います。またその時は、私の明暗両方に跨がる経験が、多少は核物理分野の発展の役に立つのではないかと考えています。

---

田村 裕和

東北大（院）理・教授

この2年を振り返ると、電気代不足などの問題のため、RIBF と J-PARC はもとより、RCNP や ELPH、大学の施設いずれも大変厳しい状況となり、素晴らしい施設を持ちながらそれを十分生かせないことに忸怩たる思いでした。電気代問題に関しては、核物理委員会の要望を受けて学術会議・素粒子原子核分科会も対応を検討しましたが、他分野を説得できず有効な手立てが打てませんでした。両委員会にかかわった者として皆様に申し訳なく思っています。この困難な問題に対処するには、関係機関や他分野との一層の連携や働きかけが必要ですが、最終的には、核物理と加速器科学に対する市民の理解が不可欠です。道のりは遠いですが、核物理委員会が中心となって、HP の充実やパンフレット制作とともに、市民向け講演会や見学会、出前授業などのアウトリーチ活動を、各施設や大学と協力して進められればと思います。

一方、いま学術会議のマスタープラン改定が行われつつあります。J-PARC ハドロン施設拡張や RIBF 高度化といった将来計画の実現への道筋をつけるため、出来る限りのお手伝いをしたいと思います。また、この機会に、我々の分野の長期的な将来計画を改めて考える必要もあると考えます。とくに若手の皆さんに議論を深めていただき、1年くらいをかけて「日本の核物理の将来」レポートを改訂したいと思っています。

---

永江 知文

京大（院）理・教授

J-PARC と RIBF を2本柱としてきた日本の核物理研究もやっとな成果を实らせつつあり、実った成果を刈り取る時期にあります。これまで以上に理論と実験の連携が重要となると思います。これらに全力で貢献していきたいと考えています。

また、その成果を基に、この2本柱に続く将来の夢のある研究計画を練り上げる時期にもあります。目先のみにとらわれずに将来を見据えたいと思います。

---

中村 哲

東北大（院）理・教授

現在、日本は J-PARC, RIBF といった大型研究施設に加え、RCNP, ELPH を初めとする大学所属の加速器研究施設において多様な原子核研究を精力的に展開しています。

その一方で厳しい予算状況の下、将来へのさらなる発展を継続するためには、国際化推進の波に乗り、世界にその存在感を示すことが必要と考えます。

もし、核物理委員に選んでいただけたら、これまで素核研将来検討委員会、J-PARC, RIBF PAC、日本の核物理レポート WG 等において議論に参加させていただいた経験、海外研究施設(JLab,Mainz)等で研究を推進してきた経験、大型研究施設・大学所属の加速器施設の双方で研究を進めてきた経験を活かし、現在、そして未来の原子核物理学の発展に寄与できるよう微力を尽くしたいと考えます。

---

中村 隆司

東工大（院）理工・教授

RIBF、J-PARC という世界的な拠点研究施設が軌道に乗りつつあり、(運転費用の問題などはありませんが) 日本の核物理分野は総じて順調に見えます。しかし、今後 5、10、20 年先にどのような核物理を展開したいか、という将来に対する視点が重要です。若手を中心とする将来計画に関する活動を今後とも支えていきます。また、核物理の研究を通じた「教育」がますます重要になると思います。学部生によるポスター発表は、2016 年春の物理学会より核物理分野が先行して開始されますが、今後はこれを軌道に乗せ、他分野にも拡げること尽力します。

---